

『京城日報』に見るソプラノ歌手
永井郁子（1893～1983）の朝鮮楽旅

津 上 智 実

Concert Tours to Colonial Korea of the Soprano Singer NAGAI Ikuko
(1893-1983) reported in *Keijo Nippo*

TSUGAMI Motomi

Abstract

This paper aims to clarify the six recital tours to Colonial Korea by the Japanese soprano singer, NAGAI Ikuko (1893–1983) by examination of the Korea Governor’s Office newspaper, *Keijo Nippo*. As the result, forty one articles have been found from 1928 to 1932, and it became clear that her recital tours to Colonial Korea were supported strongly by the *Keijo Nippo*, especially in 1928 and 1932, followed by another private newspapers as the *Fuzan Nippo* or *Chosen Shimbun*. Forty two recitals of her were reported by these articles, although they are apparently only partial, in some of them containing the details of the programs and the reaction of her audiences.

In her first tour in 1928, for commemorating the 100th anniversary of Franz Schubert’s death, her program was partly changed to focus on him. In the 1st (1928) and 2nd (1930) tours, her programs were divided into three parts, that is, 1) “famous European songs (Beethoven, Schubert et al.) translated into Japanese”, 2) “selected songs of nine countries” (Japan, Manchuria, Russia, Germany, America, England, Italy, France and another one), and 3) “new Japanese songs with Japanese traditional instruments (*Koto* or *Shamisen*, composed by MIYAGI Michio et al.)”. In the 6th tour (1932), the “famous European songs translated into Japanese” section disappeared, and instead, eight Japanese songs composed by Japanese composers were sung by her as “new Japanese art songs”. It means that she judged these songs worth to be sung, after searching for such songs for many years.

As Evelyne Pieiller has argued in her *Musique Maestra* (1992), many female musicians with splendid activities have been totally forgotten in music history, and are waiting for their proper reevaluation. Nagai is one such example.

Keywords: NAGAI Ikuko, *Keijo Nippo*, Singing in Japanese Movement, MIYAGI Michio

要 旨

本稿は、朝鮮総督府の機関紙『京城日報』の調査によって、永井郁子（1893～1983）の6度に及ぶ朝鮮楽旅の全体像を明らかにすることを目的とする。調査の結果、41点の記事（1928～1932）が見出され、永井の朝鮮楽旅は『京城日報』によって口火が切られ、その後、民間新聞の『釜山日報』や『朝鮮新聞』に引き継がれていったことが判明した。特に第一回（1928年）と第六回（1932年）については、『京城日報』が強力に梃入れしたことが明らかとなった。これらの記事から42件の独唱会の存在が知られ、それらはあくまで部分的なものではあったが、演奏会の曲目や観客の反応等が分かるものも含まれている。

演奏曲目については、第一回の朝鮮楽旅が行なわれた1928年はシューベルトの没後100年を記念する年であり、シューベルトを集中的に取り上げる方向でプログラム変更がなされた。第一回（1928年）と第二回（1930年）のプログラムでは、初めに「泰西名曲（ベートーヴェンやシューベルト）の邦語訳詞歌唱」、次に「各国民謡九曲」ないしは「各国名曲九種」（日満露独英米仏伊拉）、最後に「新日本音楽」（宮城道雄作曲による新箏曲、ないし永井郁子考案の浄瑠璃歌謡曲）を置くという組み立てであったが、第六回（1932年）になると、「泰西名曲の邦語訳詞歌唱」が姿を消して、代わりに「新日本歌謡曲」として邦人作曲家の作品がまとまって取り上げられ、歌うに値する邦人作曲家の歌が出てきたという判断が永井の側にあったと理解される。

エヴリヌ・ピエイエが『女流音楽家の誕生』（1992/1995）で論じたように、輝かしい活躍をした女流音楽家たちの多くが忘却の淵に沈められている。日本歌曲の黎明期に貢献した永井郁子の事績を掘り起こし、しかるべき再評価に繋げるべく、問題の解明を続けて行きたい。

キーワード：永井郁子、京城日報、邦語歌唱運動、宮城道雄

1. はじめに

エヴリヌ・ピエイエはその著『女流音楽家の誕生』（1995）において、「中世以来、女流音楽家は存在したし、ルネッサンスあるいは十八世紀には称賛され、もてはやされた女性作曲家がおり、圧倒的な技量を持ったソリストや指揮者がいた」という事実を前に、「問題は、こうしたまばゆいばかりに輝く例外たちが、なぜこうも丹念に忘れ去られてきたのかということである」（ピエイエ、1995、8）と指摘した。ピエイエの問題提起について、訳者は「音楽の主体であった女性がなぜ忘れ去られてしまったのかと敢えて問うのだ」と要約している（同、224）。

戦前に「邦語歌唱運動」（1925～1941）を提唱して展開したソプラノ歌手永井郁子（1893～1983）も、音楽の主体として活躍した「まばゆいばかりに輝く例外」的な存在の一人と見ることができる。実際、1925年の「女流声楽家大番付」（1925年4月26日『読売新聞』掲載）において、永井郁子は横綱の三浦環（1884～1946）に次いで「ソプラノの方」の大関とされた。前頭の荻野綾子（1898～1943）や関鑑子（1899～1973）を押さえて、永井は国内筆頭の歌手として位置づけられていたのである。

しかるに今日、三浦環と「メゾソプラノ・アルトの方」の大関とされた柳兼子（1892～1984）については比較的よく知られているが¹、永井郁子は忘却の淵に沈んでいると言う他ない（津上、2019c、97）。岸辺成雄他編『音楽大事典』（東京：平凡社、1981～1983）においても、三浦環と柳兼子は立項されているが、永井郁子については立項はおろか、第6巻の索引にも名前が挙げられていないのが現状である。

1 三浦環については田辺久之『考証 三浦環』（東京：近代文芸社、1995）等があり、柳兼子についても梶谷崇「京城の音楽会『朝鮮民族美術館設立後援柳兼子音楽会』の諸相」『日本近代文学』71（2004）17～32、高仁淑「柳兼子の公演活動と朝鮮における民芸運動」九州大学大学院『大学院教育学研究紀要』7（2004）51～67等の研究がある。

このように忘れ去られた音楽家の業績を再評価するためには、その事績を当時の新聞・雑誌から丹念に拾い集めていくことから始めるしかないだろう。そこでデータベースで検索可能な『朝日新聞』『読売新聞』『台湾日日新報』について（津上、2018、2019b、c）、また同じく『釜山日報』『朝鮮新聞』『毎日申報』についての調査を順次進めてきた（津上、2019a）。

本稿では、朝鮮総督府の機関紙であった『京城日報』に掲載された記事を精査することによって、永井郁子の6度に及ぶ「朝鮮楽旅」²について、全体像を明らかにすることを目的とする。

2. 『京城日報』と朝鮮の主要新聞に見る報道

『京城日報』は、統監伊藤博文（1841～1909、在任1906～1909）によって1906年9月1日に朝鮮の京城（現在の韓国ソウル市）で創刊された日本語新聞で（井川、2016、104）、『京城日報社誌』によれば、その目的は「対韓保護政治の施策に就き之を内外に宣明し、誤認疑惑を一掃するため」であった（李、2009、98）。1910年に朝鮮総督府が置かれてからは、総督府の機関紙として機能した。この間、斎藤実総督時代（1919～1926、1929～1930）は「文化政治」時代とされるが、宇垣一成総督時代（1931～1935）以降は「兵站基地化」時代となり、総督府の御用新聞としての性格を強めていった（森山、1993、11～26）。終刊は1945年10月31日である（李、2009、221）。

今回の調査³によって、『京城日報』には永井郁子に関する記事が41点見出された。1928年4月に22点、1930年10月に2点、同11月と1931年2月と10月に各1点、1932年4月に3点、同5月に11点の計41点である。これらを本論末に「『京城日報』永井郁子関連記事一覧」（以後、「記事一覧」と略記）として掲げる⁴。

2 「朝鮮楽旅」は永井郁子自身の用語で、朝鮮演奏旅行の意。

3 2019年2月に日本文化研究センター図書室で、同7月に京都大学人文科学研究所図書室でマイクロフィルムを閲覧して記事を収集し、同10月に国会図書館東京館で確認の閲覧を行なった。

表1) 『京城日報』と既調査3紙に見る永井郁子関連記事の掲載点数(年月別)

年	月	京城日報	毎日申報	釜山日報	朝鮮新聞	計	備考
1928	4	22	4			26	「第一回鮮満楽旅」
	5			1		1	
	12				1	1	
1930	9			2		2	
	10	2		6	9	17	「再び鮮満楽旅につく」
	11	1		1		2	
1931	2	1			2	3	「四度朝鮮各地」
	10	1			1	2	「五度目の渡鮮」
1932	4	3		14		17	「朝鮮へはこれで六度」
	5	11	1			12	
計		41	5	24	13	83	

まずは、これらの記事の時間的な布置を、以前に調査した『毎日申報』『釜山日報』『朝鮮新聞』のそれと共に、「表1)『京城日報』と既調査3紙に見る永井郁子関連記事の掲載点数(年月別)」に示す。ここで備考欄に記したのは、永井郁子の「邦語運動重要年表」(永井、1932、巻末)に記載された関係箇所キーワードである。

表1から明らかかなように、永井郁子の朝鮮楽旅はまず『京城日報』によって口火が切られ、その後、民間新聞の『釜山日報』や『朝鮮新聞』に引き継がれていったことが見て取れる。特に「第一回鮮満楽旅」(1928年4月)と第六回(1932年4、5月)については、『京城日報』が強力に挺入れしていることが記事数から明らかである。

永井の「第一回鮮満楽旅」(1928年4月)については、『京城日報』の社史にも言及がある。そこでは「最近の社況」という見出しで、次のように記されている(井川、2016、106)。

4 本来、出典としてこれらの記事の翻刻を「記事一覧」中に掲載すべきであるが、記事翻刻のみで女性学評論の字数制限に迫ってしまうため、ここでは割愛せざるを得ない。

最近実行せる事業の主なるものを摘記すれば左の如し。(昭和三年四月、五月)先づ花に魁けてピクニックを兼た婦人見学団を開催、参加人員千名に達し京城帝国大学、同附属病院等の見学は得るところが少なくなかつた、次いで観桜リレー、池坊立生華大会、永井郁子女史邦語独唱会を開催し、何れも成功を納めた。

このように、『京城日報』社の主催によって永井の朝鮮楽旅は実現したのである。当時、朝鮮総督人事と『京城日報』の社長人事が連動するのは慣例となっていたので(李、2009、182)、永井の招聘は総督府の意向にも適うものと見做されていたと考えることができる。

3. 朝鮮への演奏旅行

次に、これらの記事から永井の朝鮮楽旅の実態をどこまで再構成することができるのだろうか。それを試みたのが、「表2」永井郁子の朝鮮楽旅日程」である。ここでは、独唱会の日時、会場、主催者、後援と出典を示すが、演奏会以外の動向についても丸括弧付きで記載している。

「出典」は「記事一覧」の記事番号である。新聞記事は予告記事と報告記事に大別できるが、予告記事の中には、演奏会の日時や場所が変更になる例も散見されるので、主に報告記事を掲げる。ただし、報告記事がなく、予告記事のみの事柄については、記事番号の横にアスタリスクをつけて掲げている。また、「釜山」は『釜山日報]、「朝鮮」は『朝鮮新聞]の意で、これらの記事は以前の論考に記載済みである(津上、2019a)。

なお、第一回朝鮮楽旅については、「永井郁子邦語独唱会年表」(永井 1929、137~151)にカウントがあるので、それを【】付きの番号として付記する。表中、ゴシック体で記した演奏会(第89回の仁川)は、新聞には記載がないが、この「永井郁子邦語独唱会年表」から実施したことが確かな演奏会である。

表2から、永井郁子の朝鮮楽旅に関して、第一回は6件、第二回は7件、第三回は1件、第四回は2件、第五回は1件、第六回は25件、合計42件の独唱会

表 2) 永井郁子の朝鮮楽旅日程

日時	会場	主催	後援	出典記事
【第一回】	(第一回鮮満楽旅)			
1928-4-24	(釜山上陸)			6
同上、夜	釜山、公会堂			【79】9*、12、19
1928-4-25	馬山 (実施せず) ⁵			9*
1928-4-26	大邱			【80】9*、19
1928-4-27	(7時京城到着、長谷川町備前屋旅館泊)			17、19
1928-4-27、19時半	京城、公会堂(800余席)	京城日報社(宇賀本社事業部長の開会宣言)		【81】1~19*、20~22
1928-4-28	元山			【82】9*
1928-4-29	仁川 (実施せず) ⁶			9*
1928-4-30	平壤			【83】9*
1928-5-10、夜	仁川、府公会堂			【89】
1928-5-11	(奉天から大連、旅順の方面を演奏旅行、釜山通過、九州路に向かった)			釜山 1
【第二回】	(再び鮮満楽旅)			
1930-10-8、19時半	釜山、釜山公会堂	釜山メソヂスト教会	釜山日報社	釜山 2~7*
1930-10-9、19時	鎮海、鎮海高等女学校講堂			釜山 8*
1930-10-10、18時	馬山、馬山小学校講堂	馬山高等女学校		釜山 9*
1930-10-14	元山	元山高等女学校		朝鮮 2*
1930-10-16	(新聞社訪問)			23

5 記事9番で予告されているが、記事19番の報告では言及されておらず、「永井郁子邦語独唱会年表」(永井 1929、137~151)にも記載がないので、実施されなかったと考えられる。

6 注5に同じ。

日時	会場	主催	後援	出典記事
1930-10-17、19時	京城、公会堂	朝鮮新聞社	永井郁子女史後援会	23* 朝鮮 5~9*
1930-10-22、19時	大田、大田座	大田高等女学校同窓会		24*
1930-10-23、夜	群山、喜笑館	群山日報社		朝鮮 10*
【第三回?】 ⁷				
1930-12-8	木浦（鮮滿行脚の途次）	木浦運動協会、女学校葉会		釜山 10*
【第四回】	（四度朝鮮各地）			
1931-2-21、19時	●● ⁸ 、公立小学校大講堂	●●高等女学校同窓会		朝鮮 12*
1931-2-22、18時	沙里院、旭座	京城日報社沙里院支局	在沙各新聞支局	25* 朝鮮 11*
【第五回】	（五度目の渡鮮）			
1931-10-18	（DK ⁹ からラジオ放送7曲）			26*
1931-10-19、19時	公州、道●議会議場	公州高等女学校校友会音楽部		朝鮮13
【第六回】	（朝鮮へはこれで六度）			
1932-4-14	（朝の連絡船で来鮮、ステーションホテル泊）			釜山 21
1932-4-14、18時半	釜山、公会堂	釜山日報社		釜山 11~20*、釜山 21~22
1932-4-15	群山			釜山 22*

7 上記の「邦語運動重要年表」（永井、1932、巻末）には「第三回」朝鮮楽旅に関する記載はない。1930年11月に満州を回った後、その帰路として、12月に再度朝鮮で演奏した可能性が高いので、それが第三回朝鮮楽旅に当たると意識されたのではないかと推測される。

8 戦前の新聞記事は印刷が不鮮明な箇所や誤字脱字と思われるものも多く、読み取れない部分（●で示した）も残っているが、ここでは現状の理解を示すことを優先している。

9 DKはJODKの略で、日本統治時代の京城放送局のコールサイン。

日時	会場	主催	後援	出典記事
1932-4-16	光州			釜山 22*
1932-4-17	木浦			釜山 23*
1932-4-18	大田			釜山 23*
1932-4-20	京城			釜山 23*
1932-4-21	(来城)			28*
1932-4-21	春川			釜山 23*
1932-4-23	大邱			28*、 釜山 23*
1932-4-24	鎮海と馬山			釜山 23*
1932-4-25	興南			28*
1932-4-26	威興			28*
1932-4-26	兼二浦			釜山 23*
1932-4-27	平壤			28*、 釜山 23*
1932-4-29	新義州、新義州公会堂	商業学校同窓会		27*、28*、 釜山 23*
1932-5-18、19時	兼二浦、小学校講堂	京城日報社兼二浦支局		40
1932-5-19、19時半	京城、公会堂	京城日報社		29~38*
1932-5-20	元山			29*
1932-5-22	清津			29*
1932-5-23	会寧			29*
1932-5-24	隆基			29*
1932-5-27	伝州			29*
1932-5-28、19時	全州、全州劇場	京城日報社全州支局		29*、41*
1932-5-30	馬山			29*
1932-6-1	釜山			29*

の存在が知られる。中には演奏曲目を詳細に報道した記事も含まれ（後述）、演奏会の内容や観客の反応等が詳しく分かるものもある¹⁰。

10 聴衆の様子については、「釜山大邱は定刻までに既に満員とあつてはいりきれず帰宅された方も随分ありました程盛況でございました」（記事19）、あるいは「定刻前遂に表戸を閉ぢねばならぬ程で名歌手に接せず帰つた人々もおびたしき数にのほ

その一方で、永井の演奏活動の内、新聞記事から知られるのはその一部であることも明らかである。第一回（1928）については、上記「永井郁子邦語独唱会年表」によれば6件（第79～83、89回）であるが、新聞掲載は5件で、残り1件は報道がない。第二回（1930）については、「邦語独唱会開催地及回数一覧表」（永井 1932、巻末）に「釜山2、大邱5、京城4、元山4、平壤2、仁川2、鎮海、馬山、新義州、大田、群山、裡里、全州、光州2、木浦、海州2、沙里院、鎮南浦2、清津、羅南、公州」（全37回）とあるので、第一回の開催数（釜山、大邱、京城、元山、平壤、仁川、各1回、計6回）を引くと、残り「釜山、大邱4、京城3、元山3、平壤、仁川、鎮海、馬山、新義州、大田、群山、裡里、全州、光州2、木浦、海州2、沙里院、鎮南浦2、清津、羅南、公州」の計31件となる。この内、新聞記事があるのは「釜山、鎮海、馬山、元山、京城、大田、群山」の7件のみである。

このように限定的なものではあるが、これらの新聞記事のお蔭で永井の演奏旅行の概要が浮き彫りになり、いくつかの演奏会についてはその内容と反響とが知られることも事実である。『京城日報』は京城で発行されていた新聞なので、他地域についての報道が薄いのはむしろ当然であり、そちらについては今後、別の可能性を考える必要があるだろう。

4. 演奏曲目

続いて、これらの新聞記事から朝鮮での演奏プログラムを可能な限り再構成してみたい。まず、演奏曲目が判明する演奏会を「表3）演奏曲目の判明した演奏会」に示す。

表3から、演奏曲目の詳細な報道は専ら京城での演奏会に関して行なわれたことが見て取れる。これら3つの演奏会プログラムの内実を、1928年4月27日については表4、1930年10月17日については表5、1932年5月19日については

つた」「愛誦される『埴生の宿』『サンタルチア』等は物凄いアンコールの波を浴せかけられる、女史は美声の中にシユベルトの子守唄でそれに答へた」「一曲毎にアンコールを求める拍手が四方より起こる」（以上、記事20）といった記述が見られる。

表 3) 演奏曲目の判明した演奏会

年月日	場所	出典記事
1928-4-27 【第一回】	京城公会堂	7*、17*、20
1930-10-17 【第二回】	京城公会堂	23*
1932-5-19 【第六回】	京城公会堂	32*

表 4) 1928年 4月27日 (京城公会堂、京城日報社主催) のプログラム

(出典記事：7*、17*、20)

番	番組	曲目の作曲者〈曲名〉 歌詞翻訳者 (作詞者)
1	ピアノ独奏	ショパン 〈軍隊ポロネーズ〉 (ピアノ：大平雪子)
2	シューベルト	《冬の旅》より 〈菩提樹〉 〈春の夢〉 〈駆遁〉 堀内敬三 + 〈あらしの朝〉 〈幻影〉 〈勇氣〉 〈老楽手〉 + (10分休憩)
3	シューマン	《女の愛と生涯》より 〈世の人に越えて〉 〈我が胸に抱きて〉 〈友よいざ〉 〈相見てより〉 堀内敬三
4	各国民謡五曲	(露) 〈東洋ロマンス〉 堀内敬三、(独) ヴァーグナー 〈紡ぎうた〉 近藤朔風、(英) ビシヨップ 〈埴生の宿〉 近藤朔風、 (伊) ナポリ民謡 〈サンタルチヤ〉 堀内敬三、(米) フォスター 〈スワニー河〉 堀内敬三 (ヴァイオリン・オペリガート：大場勇之助)+アンコール：シューベルト 〈子守唄〉
	休憩 (5分)	
5	[各国民謡四曲]	ロイテル 〈四葉のクローバ〉 吉丸一昌、(諸) グリーグ 〈ソルベイグの唄〉 堀内敬三、バッハ 〈アヴェマリア〉 堀内敬三、ビルダッハ 〈漂浪楽人〉 堀内敬三
	休憩	
6	[新日本音楽三つ]	宮城道雄：〈紅そうび〉 (与謝野晶子)、〈コスモス〉 (西条八十)、〈せきれい〉 (北原白秋) (箏伴奏：湊毅・大田よし子、尺八助奏：吉本竹陽・佐藤令山)

表 6 として示す。

表 4 で興味深いのは、シューベルトの歌曲を巡るプログラム変更である。予告記事 2 点 (Nos. 7、17) ではシューベルト 3 曲 (《冬の旅》より 〈菩提樹〉 〈春の夢〉 〈駆遁〉) とシューマン 4 曲 (《女の愛と生涯》より 〈世の人に越えて〉 〈我が胸に抱きて〉 〈友よいざ〉 〈相見てより〉) とされていたものが、報告記事 (No. 20) を見ると、実際にはシューベルト 7 曲 (《冬の旅》より 〈菩提樹〉 〈春の夢〉 〈駆遁〉 〈あらしの朝〉 〈幻影〉 〈勇氣〉 〈老楽手〉) へと変更されたことが読み取

表5) 1930年10月17日(京城公会堂、朝鮮新聞社主催、永井郁子女史後援会)のプログラム
(出典記事: 23*)

番	番組	演奏曲の作曲者〈曲名〉歌詞翻訳者(作詞者)
1	ピアノ独奏	ショパン〈ノクターン〉、[メンデルスゾーン ¹¹]〈前奏曲〉 (ピアノ: 藤井光子)
2	ベートーヴェン3曲	〈愛しきジヨニー〉、〈我御身を愛す〉、〈神の御稜威〉堀内敬三
3	シューベルト3曲	〈子守唄〉、〈鮎〉、〈野薔薇〉堀内敬三
4	各国名曲九種	(日)〈さくら〉、(支)〈娘娘際〉、(露)〈娘の叫び ¹² 〉、(独)〈折ればよかった〉、(英)〈故郷の廃家〉、(米)〈オールドブラックジョー〉、(伊)〈サンタルチア〉、(仏)〈悲歌〉、(拉)〈アベマリア〉
5	新箏曲 ¹³	〈母の唄〉、〈若水〉、〈せきれい〉
6	浄瑠璃歌謡曲	義太夫〈阿波鳴門〉、〈世三間堂〉、〈朝顔日記〉

れる。1928年はフランツ・シューベルト(1797~1828)の没後100年を記念する年であり、予告記事(No. 17)でも「今年百年祭を各地で挙行されるシューベルト作曲になる『冬の旅』」と紹介されている。さらに1928年5月4日(第7338号6面1~3段)と5日(第7339号6面1~3段)の二日連続で大場勇之助¹⁴の記名記事「貧しき楽聖、シューベルトの百年祭に際して」が『京城日報』に掲載された。こうした流れの中で、シューベルトを集中的に取り上げる方向でプログラム変更がなされたものと考えられる。

表4(1928)と表5(1930)は基本的に同じプログラム構成を示している。初めに「泰西名曲(ベートーヴェンやシューベルト)の邦語訳詞歌唱」、次に「各国民謡九曲」ないしは「各国名曲九種」、最後に「新日本音楽」(新箏曲ないし浄瑠璃歌謡曲)を置くという組み立てである。その際に、「各国民謡」・「各国名曲」が基幹プログラムをなし、各国の歌については複数の候補があって、

- 11 『朝鮮新聞』1930年10月16日(木)3面2~6段の記事(津上 2019a, 66)による。
- 12 同上によれば〈ヴォルガ舟唄〉で、曲名に食い違いが見られる。
- 13 いずれも宮城道雄の作曲による作品。
- 14 大場勇之助は京城在住のヴァイオリン奏者で、永井郁子の助演者の一人。『京城日報』では「半島楽壇の元老として自他ともに許す大場勇之助氏」(記事6)と紹介されている。

表6) 1932年5月19日(京城公会堂、京城日報社主催)のプログラム(出典記事:32*)

番	番組	演奏曲の作曲者(曲名) 歌詞翻訳者(作詞者)
1	ピアノ独奏	〈乙女の祈り〉(ピアノ:藤井光子)
2	[新日本歌謡曲]六曲	(1)〈秋の月〉、(2)〈出船〉、(3)〈ふる里〉、(4)〈春の月〉、 (5)〈京のいとはん〉、(6)〈昼の夢〉
	(休憩:10分)	
3	各国名曲八謡	(日)〈姫松〉〈若竹〉、(満)〈娘々祭〉、(露)〈バラと乙女〉、 (独)〈折ればよかつた〉、(英)〈美しき〉、(米)〈ミネト ンカの湖畔にて〉、(佛)〈小夜楽〉、(伊)〈眠りしニーナ〉
	(休憩:10分)	
4	特別番外二種	(1)〈唐人お吉〉、(2)〈龍峡小唄〉
	(休憩:10分)	
5	義太夫歌謡曲六謡	『阿波鳴門』中の〈巡礼歌〉、『妹背山』中のお三輪の〈馬 子唄〉、『本蔵下屋敷』中の〈三千歳別れの歌〉、『三十三 間亭』中の〈木遣音頭〉、『先代萩』中の〈雀の歌〉、『朝 顔日記』中の〈朝顔の歌〉(三味線伴奏 竹本奈良梅師)
6	〈君が代〉合唱	会衆一同

その中から選んで組み合わせるという手法は、台湾での演奏プログラムと同様である(津上、2019c、105)¹⁵。

表6から明らかなように、第六回の1932年になると、永井のプログラミングに大きな変化が見られる。すなわち、「泰西名曲の邦語訳詞歌唱」が姿を消して、代わりに「新日本歌謡曲」として邦人作曲家の作品がまとまって取り上げられているのである。ここで歌われた6曲の作詞者と作曲者を表7に示す。

さらに、「特別番外二種」も邦人作曲家の作品である。この2曲の作詞者と作曲者を表8に示す。

15 なお、前稿(津上、2019a、51)の表6に誤記があったので訂正しておきたい。訂正後の表を下に掲げる。

表6) 3つの演奏会のプログラム構成

年月日	場所	P1	P2	P3	P4	P5	P6	プログラム構成順
1930-10-7	釜山公会堂	○		○	○	○	○	1+6+3+4+5
1930-10-17	京城公会堂	○			○		○	1+4+6
1932-4-14	釜山公会堂		○	○	○	○		2+4+3+5

表7) 新日本歌謡曲の作歌者と作曲者

曲順	曲名	作歌者	作曲者
1	〈秋の月〉	滝廉太郎 (1879~1903)	滝廉太郎 (1879~1903)
2	〈出船〉	勝田香月 (1899~1966)	杉山長谷夫 (1889~1952)
3	〈ふる里〉	金城栄治 (1903~1931)	宮良長包 (1883~1939)
4	〈春の月〉	高安月郊 (1869~1944)	弘田龍太郎 (1892~1952)
5	〈京のいとはん〉	高尾亮雄 (1879~1964)	澤田柳吉 (1886~1936)
6	〈昼の夢〉	高安月郊 (1869~1944)	梁田貞 (1885~1959)

表8) 特別番外二種の作歌者と作曲者

曲順	曲名	作歌者	作曲者
1	〈唐人お吉〉	西條八十 (1892~1970)	佐々紅華 (1886~1961)
2	〈龍峽小唄〉	白鳥省吾 (1890~1973)	中山晋平 (1887~1952)

表7と表8に掲げた8曲の内、〈出船〉を除く7曲は、永井郁子の「演奏五百回記念独唱会」(1932年3月1日、於：日比谷公会堂)の第一部で歌われた「新日本歌謡二十六曲」に含まれる曲である。永井の基本的な考え方は、「もちろん、わたくしとしても何時までも邦訳歌詞を歌つて満足しているわけではありません。文字通り日本人の血と肉との盛られたわたくし共の琴線に触れる名曲を歌ふのが念願なのでございます」という「日本音楽への進出について(下)」の一文(記事35)に端的に示されている。上記の第500回の記念公演に際して、永井は邦人作曲家から歌曲を募り、応募作120曲の中から26曲を選んで歌った(永井、1932、1)。その中の7曲を2ヶ月半後の京城での演奏会で取り上げたことになる。

表7と表8に見るように、ここでは生年順に、滝廉太郎(1879生)から宮良長包(1883生)、梁田貞(1885生)、澤田柳吉(1886生)、佐々紅華(1886生)、中山晋平(1887生)、杉山長谷夫(1889生)、そして弘田龍太郎(1892生)までの作曲家が取り上げられている。これは、ようやく歌うに値する邦人作曲家の歌が出てきたという判断が永井の側にあったことを意味する。

また、表5の6番と、表6の5番とに置かれた「義太夫歌謡曲六謡」は、三

味線奏者の杵屋佐吉（第4代、1884～1945）の協力を得て、伝統的な義太夫を洋楽の発声で歌うことを目指した永井郁子考案の新ジャンルである。これも表5（1930年10月17日）では3曲であったものが、表6（1932年5月19日）では6曲に増えており、レパトリーの拡大が継続的に図られていたことが窺われる。

さらに、表6（1932年5月19日）では、最後に番組6番として「会衆一同」による「〈君が代〉合唱」が組み込まれているのも注目される。永井が邦語独唱会の終わりに聴衆と共に〈君が代〉を歌うのを慣例化していたこと、それを当時の植民地においても実行していたことは、すでに前稿で指摘した通りである（津上、2019、52～53）。

5. おわりに

本稿においては、朝鮮総督府の機関紙であった『京城日報』の調査によって、永井郁子に関する記事が1928年4月に22点、1930年10月に2点、同11月と1931年2月と10月に各1点、1932年4月に3点、同5月に11点の計41点見出された。その結果、永井郁子の朝鮮楽旅はまず『京城日報』によって口火が切られ、その後、民間新聞の『釜山日報』や『朝鮮新聞』に引き継がれていったことが判明した。特に第一回（1928年4月）と第六回（1932年4、5月）については、『京城日報』が強力に挺入れしていることが明らかとなった。永井の朝鮮楽旅に関して、第一回は6件、第二回は7件、第三回は1件、第四回は2件、第五回は1件、第六回は25件、合計42件の独唱会の存在が新聞記事から知られた。それらはあくまで部分的なものではあるが、中には演奏曲目を詳細に報道した記事も含まれ、演奏会の内容や観客の反応等が分かるものもあった。

演奏曲目については、第一回の朝鮮楽旅が行なわれた1928年はシューベルトの没後100年を記念する年であり、シューベルトを集中的に取り上げる方向でプログラム変更がなされた。第一回（1928年）と第二回（1930年）のプログラムでは、初めに「泰西名曲（ベートーヴェンやシューベルト）の邦語訳詞歌唱」、次に「各国民謡九曲」ないしは「各国名曲九種」、最後に「新日本音楽」（宮城

道雄作曲による新箏曲、ないし浄瑠璃歌謡曲)を置くという組み立てであったが、第六回(1932年)になると、「泰西名曲の邦語訳詞歌唱」が姿を消して、代わりに「新日本歌謡曲」として邦人作曲家の作品がまとまって取り上げられ、歌うに値する邦人作曲家の歌が出てきたという判断が永井の側にあったと理解される。

エヴリヌ・ピエイエは、「問題がなくなった時はじめて、作品と実践が存在することになるだろう。そして、その時はじめて歓喜が、新たな現実が立ち現れるであろう」と記した(ピエイエ、1995、109)。新たな現実が立ち現れるレベルまで、永井郁子とその時代が抱えていた問題の解明を続けて行きたい。

参考文献

- 井川充雄 2016 監修『戦前期「外地」雑誌・新聞総覧＝朝鮮・満州・台湾の言論界』(全9巻)金沢：金沢文甫閣。
- 津上智実 2018「朝日新聞データベース『聞蔵Ⅱ』に見るソプラノ歌手永井郁子(1893～1983)」『神戸女学院大学論集』65-2：83～100。
- 津上智実 2019a「『釜山日報』『朝鮮新聞』『毎日申報』に見るソプラノ歌手永井郁子(1893～1983)」神戸女学院大学女性学インスティテュート『女性学評論』33：41～68。
- 津上智実 2019b「読売新聞データベース『ヨミダス歴史館』に見るソプラノ歌手永井郁子(1893～1983)」『神戸女学院大学論集』66-1：45～59。
- 津上智実 2019c「『台湾日日新報』に見るソプラノ歌手永井郁子(1893-1983)の台湾楽旅」『神戸女学院大学論集』66-2：95～111。
- 永井郁子 1932『いばらの道：邦語歌唱十六講』東京：噴泉堂。
- ピエイエ、エヴリヌ 1995『女流音楽家の誕生』金子美都子、川竹英克訳、東京：春秋社。
- 森山茂徳 1993「現地新聞と総督政治——『京城日報』について」大江志乃夫他編集『文化のなかの植民地』(岩波講座「近代日本と植民地」7) 東京：岩波書店、3～30。
- 李相哲 2006『朝鮮における日本人経営新聞の歴史(1881～1945)』東京：角川学芸出版。

『京城日報』永井郁子関連記事一覧

- 1) 1928-4-18(水) 夕刊第7323号 2面 3-6段「邦語独唱の名手／永井郁子女史来る／本月下旬葉桜のころ／本社招きによつて」【写真(3段抜)「写真は永井郁子女史」】
- 2) 1928-4-20(金) 朝刊第7325号 7面 2-8段「永井郁子女史来る」「人類の念願／平和

- の雄叫び／波紋を投げかけた／女史の声明書】【写真（2段抜）「写真は邦語歌詞を提げて立つた女史最初のステーション姿】
- 3) 1928-4-21(土) 夕刊第7326号 2面 4-7段「永井郁子女史独唱会／伴奏大平雪子嬢】
【写真（1段：顔写真）】
 - 4) 1928-4-21(土) 朝刊第7326号 7面 1-6段「当然な道へ／当然な歩み／遂に報ひられた／女史、苦闘の三年】【写真（3段抜）「写真は永井女史】
 - 5) 1928-4-22(日) 夕刊第7327号 3面 2-5段＝3)
 - 6) 1928-4-22(日) 朝刊第7327号 7面 6-9段「永井郁子女史来る」「その夜を飾る／京城の名手／大場勇之助氏や／その他も賛助出演」
 - 7) 1928-4-24(火) 夕刊第7329号 2面 5-8段「永井郁子女史来る」「国語で歌ふ／泰西の名曲／当夜のプログラム成る／二十七日公会堂で」
 - 8) 1928-4-24(火) 夕刊第7329号 3面 2-5段＝3)
 - 9) 1928-4-25(水) 夕刊第7330号 2面 3-5段「夢幻の世界へと／肉声美の魅惑／楽壇の期待は大きい」「永井郁子女史声楽の夕】【写真（各1段）「上から賛成出演の大場勇之輔、吉本竹陽、湊毅の各氏】
 - 10) 1928-4-25(水) 朝刊第7330号 7面 1-3段＝3)
 - 11) 同、4-9段「郁子女史を称へる」「創造の音楽／模倣排斥の大旗／見事成功した永井さん」（五十嵐京師教諭談）、「天晴れ／名歌手」（進明高女／渡邊教諭談）、「ソプラノの／第一人者」（吉本竹陽氏談）、「朝鮮最初の／提携」（佐藤令山師談）
 - 12) 1928-4-26(木) 夕刊第7331号 2面 1-8段「母国語を愛する／訳歌詞は創作の第一歩／誤まれる世界主義の上へ／永井郁子女史語る」[釜山特電】【写真「助演の人」上（2段抜）大平雪子嬢、下左（1段）佐藤令山氏、下右（1段）太田よし子女史】
 - 13) 1928-4-26(木) 朝刊第7331号 7面 1-4段＝3)
 - 14) 同、5-9段「郁子女史を讃へる」「喜ばしいもの一つ」（平岡夫人談）、「理想の一端／を開くもの」（早野夫人談）、「感激は／常に新しい」（戸田夫人談）
 - 15) 1928-4-27(金) 夕刊第7332号 2面 5-8段「母国語を愛する／訳歌詞は創作への第一歩／誤まれる世界主義の彼方へ／永井郁子女史語る」
 - 16) 同、9段「邦訳歌詞／レコード」
 - 17) 1928-4-27(金) 朝刊第7332号 7面 2-8段「郁子女史の独唱会／宵愈よ公会堂で】
【写真（永井は2段抜、大平は1.5段、他は各1段）「写真は（上より）永井郁子、大平雪子、佐藤令山、湊毅、太田よし、吉本竹陽、大場勇之助諸氏】
 - 18) 1928-4-28(土) 夕刊第7333号 1面 3-7段「今夜／午後七時から／永井郁子女史邦語独唱会／満員にならない中にお早く／会場／京城公会堂」[予告]
 - 19) 1928-4-28(土) 夕刊第7333号 2面 1-2段「今宵、華やかに／名手名曲を唄ふ／風甘き晩春の一夜を／皆さま公会堂へ」「今夜は、懸命に／唄ひます／けさ京城に着い

- た／永井女史語る】【写真（4段抜）「今夜、公会堂で唄ふ永井女史（左）と伴奏の大平嬢（右）」】
- 20) 1928-4-28(土) 朝刊第7333号 7面5-8段「名曲、訳詞、美声／満堂を魅了した郁子女史／幾度びかのアンコールに／盛会だつた独唱会」【「気持よく歌へた／音楽の理解が深い聴衆／郁子女史語る」】
 - 21) 同、7-8段「気持よく歌へた／音楽の理解が深い聴衆／郁子女史語る」
 - 22) 1928-4-29(日) 夕刊第7334号 3面1-4段「永井女史独唱の夕」【写真（2段抜が2枚で4段）「上はステージにたてる女史と伴奏者大平嬢、下は聴衆」】
 - 23) 1930-10-17(金) 夕刊第8223号 3面3-4段「永井郁子の／独唱会／あす公会堂で」【写真（2段抜）「写真は本社訪問の同女史」】
 - 24) 1930-10-19(日) 第8225号 9面14段「永井女史／独唱会／二十二日大田で」【忠清南道】
 - 25) 1930-11-11(火) 第8247号 5面2-3段「全羅北道」【永井女史の独唱会／講堂の使用罷りならぬ／興業とみなして】「興業と見る外なし／沖全州署長語る」
 - 26) 1931-2-19(木) 朝刊第8343号 4面12段「永井女史／独唱会／二十二日沙里／院旭座で」【黄海道】（沙里院）
 - 27) 1931-10-18(日) 夕刊第8583号 4面4-5段「ラヂオ」【ソプラノ独唱／午後八時】「邦訳歌詞で／小曲を独唱 永井郁子、ピアノ伴奏 藤井光子」【顔写真（半段）】
 - 28) 1932-4-20(水) 8763号 5面8段「永井女史独唱会」
 - 29) 1932-4-23(土) 8766号 7面9-10段「邦語独唱の永井郁子女史／鮮満音楽旅行の途来城」
 - 30) 1932-4-26(火) 朝刊第8769号 6面7段「いばらの道（永井郁子著）」【新刊紹介】
 - 31) 1932-5-12(木) 朝刊第8784号 7面5-8段「永井郁子女史来る／十九日夜音楽会」【顔写真】
 - 32) 1932-5-18(水) 第8790号 3面4-7段「日本の言葉で歌ふ／永井女史の独唱会／十九日京城公会堂で」【曲目】
 - 33) 1932-5-18(水) 第8790号 3面3-7段「日本音楽への進出について（上）永井郁子」
 - 34) 1932-5-19(木) 第8791号 2面1-6段「唄はんとする／浄瑠璃歌謡曲」【邦語独唱家 永井女史音楽会／明夜公会堂で開く】【写真（1段）「写真は永井女史」】「諸家の評」（今井慶松氏）（豊澤猿之助氏）
 - 35) 1932-5-19(木) 第8791号 3面3-7段「日本音楽への進出について（下）永井郁子」
 - 36) 1932-5-19(木) 第8791号 3面3-7段【予告】「明夜／午後七時半／永井郁子女史／邦語独唱会」
 - 37) 1932-5-19(木) 朝刊第8791号 7面8-10段【予告】「今夜／午後七時半から／永井郁子女史／邦語独唱会／公会堂に於て／主催／京城日報」

- 38) 1932-5-20(金) 夕刊第8792号 2面 7-9段 【予告】「今夜／午後七時半から／永井郁子女史／邦語独唱会／公会堂に於て／主催／京城日報」
- 39) 1932-5-20(金) 夕刊第8792号 2面 8-9段 「こ宵唄ふ／永井女史の名調」「期待される浄瑠璃歌謡曲」
- 40) 1932-5-20(金) 第8792号 5面 9段 「永井女史／兼二浦で唄ふ」【兼二浦】
- 41) 1932-5-26(木) 朝刊第8798号 5面 9段 「永井女史／独唱会／二十八日／全州劇場で」【全州】【写真（1段：顔写真）「写真は永井郁子女史」】

(本研究は JSPS 科研費 JP18K00155を受けたものです)